

郷土芸能

# 釜石虎舞

KAMAISHI TORAMAI



釜石観光物産協会

## 釜石虎舞分布図

- ① 鶉住居虎舞
- ② 大石虎舞
- ③ 尾崎町虎舞
- ④ 片岸虎舞
- ⑤ 小白浜虎舞
- ⑥ 沢田虎舞
- ⑦ 白浜虎舞
- ⑧ 砂子畑道々虎舞
- ⑨ 只越虎舞
- ⑩ 錦町虎舞
- ⑪ 箱崎虎舞
- ⑫ 平田虎舞
- ⑬ 松倉虎舞
- ⑭ 両石虎舞

釜石市



### かまなび

釜石まるごと観光Navi

<http://kamaishi-kankou.sakura.ne.jp/>

### 釜石観光物産協会

〒026-0031  
岩手県釜石市鈴子町22-1シープラザ釜石  
TEL 0193-27-8172 / FAX 0193-27-8173  
E-mail kamaishi-kankou@taupe.plala.or.jp  
定休日:隔週火曜日(不定期)

### 釜石観光総合案内所

〒026-0031  
岩手県釜石市鈴子町22-4 ホテルフォルクローロ三陸釜石  
TEL 0193-22-5835 / FAX 0193-31-1166  
E-mail kamaishi-kankou@bz04.plala.or.jp  
定休日:隔週水曜日(不定期)



# 囃子

囃子は大太鼓、小太鼓、笛、テビラ金、掛け声からなっています。祭典の場合は、木片で山車の横板等をたたいて、掛け声と共に調子と威勢をつけます。

大太鼓、小太鼓の打ち手は1人で、小太鼓は前の右側に横たえ、同時にまたは交互に叩いて、踊りの調子を取ります。

笛の吹き手は2人、これは太鼓の拍子を取り舞踊と囃子の基本となるので、最も重要なものであります。そして笛特有の優雅な音律は、囃子そのものに一脈の情趣を添わします。

テビラ金(本名銅鍬子、俗称手拍子の方言)手元は3尺から4尺、金属性の高いながらもさびのある音調はいとど賑やかな囃子を調子づけながら、渋みをそえます。

## 掛け声

釜石の虎舞 ハネ虎舞

一杯呑まねば気アすまねえ

「大漁万作 商売繁昌でエー

ヨイトサノサー」

「鍋 釜 売っても

良い娯持たんせ

「一生の花だよ」

「ホー ホー ハー ヨイトサー」

「ソコラガ大事だ」

「ソコラガ大事だ」

「ソレ アヨイトサー」

せつせと 囃せば 親方よろこぶ

「ホー ホー ハアー ヨイトサー」

虎はどこだ オセエー オセエー

「ハアー ヨイヤサー」



## 釜石虎舞演舞について

演技 踊りの仕組みは、まず虎を型とったものの中に前後2人の者が入り、巧みにこれを使いわけます。この外に子供等数名が、ササラ、槍、扇子を持って虎とともに舞います。三陸沿岸に伝えられる虎舞の演目はおよそ次の3種があげられます。

### 「遊び虎」(別称 矢車)

春の日差しを浴び無心に遊び戯れる態様を表現。この時の太鼓の撥擲きが5月の鯉のぼりの先端に取り付けられた矢車が風にくるくる回る姿に似ているので別称を「矢車」ともいいます。踊り数人が扇を持って共に踊り、如何にも優美なものです。



### 「跳ね虎」(別称 速虎)

目的の場所に追い込まれた虎が手負いとなって荒れ狂い、流石の獵師や勢子達も及ばなくなるが、気丈な和彦内が一人で之を仕留めるという舞を表現したものです。虎舞の中で最も勇壮闊達な踊りです。



### 「笹喰み」

繁殖期にある虎が、盛んに獲物を求め焦燥し、笹にかみついて歯を磨くなど気性が荒くなり、獵師が虎狩りするものこの頃だという伝説によるもので笹竹をくわえて踊る姿は虎の習性を良くあらわしている。一説に虎は竹の子を好物とし、それを探す態であるともいわれています。

舞も囃子も一段と活気をおび舞のクライマックスに。そして踊子は手にササラを持って、虎の猛襲を避けながらだんだん目的の場所へ追いやる風に踊ります。





# 釜石虎舞

KAMAISHI TORAMAI

虎舞は、古くから釜石に  
伝えられている郷土芸能で、  
現在、市内に14の団体があります。  
伝承地によって演目に違いはありますが、  
虎の装束を身にまとい総勢15人位で踊る姿は、  
虎の生態がみごとに舞踏化されていて、  
威勢の良い独特の囃子と動きから、  
海の男の心意気が伝わってきます。  
現在は、市の無形文化財として  
5団体の虎舞が指定されています。

## 釜石虎舞

### 釜石市指定無形文化財

#### 片岸虎舞

平成10年7月30日指定

片岸虎舞は、江戸時代中期、近松門左衛門の人形浄瑠璃に端を発し、江戸歌舞伎で上演された「国性爺合戦」の劇中「千里ヶ竹」の場、和藤内の虎退治の場面があるが、それを風流舞の「虎踊り」とされたものが「虎舞」となると伝えられている。虎の勢いのよい仕草と「アホ」の速い囃子が虎の勇壮な舞と合わせて、山田方面の大沢より伝播し近郷に広がった踊りとされている。  
片岸で虎舞が始められておよそ200余年になると言われているが確証はない。しかし、片岸に現在も伝わる大太鼓の銘書に文化年間の記録があり、このことから江戸時代末期には、すでに踊られていたことが知られる。



#### 両石虎舞

平成10年7月30日指定

両石虎舞は、航海の安全と大漁祈願として江戸時代中期から踊り始められたと伝えられている。  
両石地区は、古くから三陸漁場を臨む漁港として、また、江戸時代後期には、



近代製鉄発祥の橋野高炉より出銃の船積場として賑やかな漁港であった。祭礼時には岸から岸へ小船を並べ繋ぐ船橋を、御輿や、威勢のよい虎舞や山車等が渡る光景は、活気あふれる浜祭りとして好評を博したと言いつた。

#### 錦町虎舞

平成10年7月30日指定

錦町虎舞は、門前虎舞と称したが町名の変更により

錦町となり、現在は浜町3丁目となっているが、前町名のまま「錦町虎舞」と呼称している。

虎頭も古昔は権現頭を虎様に彫刻したものを使用していたが、大正期に門前居住の藤沢高一氏により工夫製作された張り子製となりよりリアルなものに変化し、軽くて自由に虎頭を動かせることにより、舞が活発勇壮に踊るようになったと同町の虎舞の長老故澤田長助氏は語っていた。



舞歴としては、毎年10月の尾崎祭、6月の綿津見祭の祭礼供奉の他、各種芸能大会で披露されている。

錦町虎舞は市内虎舞団体の中でも重厚で内容豊かな代表的団体といわれている。その他として刺鳥舞、狐獲り、おかめ漫才、御祝、甚句等も伝承されていた。

#### 尾崎町虎舞

平成10年7月30日指定

尾崎町虎舞は尾崎町の町名を称しているが、元は台村と言われ現在は浜町2丁目に伝わる。「尾崎虎舞」が前身である。  
江戸時代の元禄14年頃、山田地方の大沢虎舞から伝授された松倉虎舞が始まると伝えられ、漁師達の海上安全と大漁を祈願して奉納されてきた。

伝統芸能は南部寿松院支配年行司太神楽より譲り受け、踊りの特徴は聖獣とされた虎に願望を話し、漁師町らしい浜っ子気質の威勢の良い独特の囃子と、虎の猛々しい生態を表した舞が特徴とされ、演目には矢車、跳ね虎、笹喰みの他に龍虎舞や刺鳥舞なども受け継がれている。



#### 鶴住居虎舞

平成24年11月28日指定

鶴住居虎舞は、鶴住神社に奉納する舞であり、鶴住神社祭典には御神輿のお供として参加する。昭和初期に銅版が巻いてある横笛が発見された。その笛には「巳之松」の銘が刻まれており、言い伝えなどにより江戸時代末期のものであると推測される。また、伝承者は江戸時代中期頃の創始と伝えられている。



鶴住居虎舞は太神楽の拍子を取り入れたようにも思われる趣を持ち、虎頭踊りは優雅で「難虎」と言われる。手踊りの演目が多いのが特徴である。





## 釜石虎舞の由来

虎舞については釜石、大槌地区に口伝として諸説が伝えられています。

平安時代の武将鎮西八郎為朝の三男で、鎌倉時代に陸奥の国を領有していた閉伊頼基が、将士の士気を鼓舞するため虎の装束を身に付けて踊らせたと伝えられる。鎮西八郎為朝（1139〜1177）は源義朝の弟であり、頼朝や義経の叔父にあたる。

現在は、浜町の尾崎神社御祭神として奉られ、毎年10月の第3日曜日に「釜石まつり」が奉納されている。

また江戸時代中期には、三陸随一の豪商として名高い前川善兵衛助友（通称吉里吉里善兵衛）が江戸で近松門左衛門（杉森信盛・承応2（1653）年生まれ）の浄瑠璃「国性爺合戦」の一節「千里ケ竹」和藤内の大虎退治の場に感動。山田大沢出身の船方衆がこれを故郷に持ち帰って創作舞踊とし、笛や太鼓の囃子も賑やかに神に奉納したとされる。

当時船乗りは、「板子一枚、下は地獄」と言われ、漁師の家族にとって無事帰港することが何よりの祈願であった。「虎は一日にして千里いって、千里帰る」ということわざから、無事に帰ることを念じ、虎の習性に託して踊った虎舞が沿岸漁民のあいだに広がっていったとされる。

虎には、火伏せの霊力があるといわれ、行者や修験者（山伏）が火勢鎮圧のため空中に虎という字を描く作法がある。木造建築である我が国にとって、火災は最大の災難であることから火伏を祈願し、高い瓦屋根の上で舞う勇壮な虎舞が気仙地方に伝わっている。三陸沿岸においても度々の大火に見回れ火難鎮護の信仰から虎舞が舞われるようになったとされる。

このように由緒、由来については、確定的な文書、資料もなく口伝として代々伝えられ現在に至っている。



## 釜石虎舞演舞

釜石郷土芸能祭（1年おきの冬季）

釜石さくら祭り（3年おきの4月下旬）

釜石まつり（10月中旬）

全国虎舞フェスティバル（毎年）